

やすらぎ

平成19年11月号 / 250円

Mika
(arrival and change)

Mecca
(circling the Kaaba)



Plain of Mina

Muzdalifah

地球上ではどの瞬間にも、日に五度の定時の礼拝が行なわれており、地球のあらゆる方向から、偉大なるカーバに向かって礼拝を行なうイスラーム教徒たちが作り出す、同心円のような形でカーバを取り囲む多くの礼拝の列、開きまた閉じるバラの葉のような、クヤームやルクーやサジュダによって継続的に動きや活気が行なわれているのです。礼拝は、五つの、もしくは五色をした一つのベルトのように世界をとらえ、しっかりと天に結び付けます。



今月号 内容

犠牲祭が近づくと、預言者イブラーヒームがアッラーに命令され息子のイスマーイールを犠牲に捧げようとした、アッラーへの絶対的服従を物語る試練を思い出します。この話に限らないことではありますが、話の筋は知っていながらもそれを読んで感じたり考えることが時間を追うにしたがって少しずつ変化していくのを実感するときがあります。この故事に関していえば、当初は、本当にあったかどうかも分からない理解を超えた寓話、ぐらゐの感想だったように思いますが、今年は、アッラーからの信託という視点で自分自身に置き換えて考えさせられています。

私たちに与えられているものはすべて、全存在の創造主であられるアッラーから授けられたものです。さらにいうならば、授けられたというよりは信託として預けられたというのがより正しいでしょう。この世で人間として、様々なものを享受する恩恵を受けた一方で、所有するあらゆるものを適宜相応しいやり方で取り扱い、使用する責任があります。また預けられたものである以上、いつかは元の持ち主が好むように処理されたり、持ち主に返すのが当然なのです。しかし私のような人間は預かりものであることを忘れがちで、価値を理解せず、また目先の欲深さから手放すことを恐れてしまうことがあります。

時間であれ、労力であれ、お金であれ、自分自身の心身であれ、手元に一時的に存在しているものをいかなる目的のためにどう使うのか、悩みながらも考えることは創造主が望まれることに思いを馳せ、自身のとらわれや存在意義を見つめることにもつながります。

日本国内で生活していると、犠牲祭、そして同時期に行われる巡礼への感慨が得られにくいのですが、この行事にまつわる逸話や体験談などを通じて、何かを感じ学びとっていただけることを願っています。

- ❧ 編集部より 2
- ❧ 心を知る：
 クラブとブッド（近しさと遠さ） 3
- ❧ 預言者ムハンマドを語る：
 布教への熱心さ 5
- ❧ 正しさ、真実と公正さ、善と災い 8
- ❧ リサーレイヌールより：
 13番めの光 10
- ❧ 映画から考える：
 『UFO少年アブドラジャン』 12
- ❧ 地上の良心 カーバ 14
- ❧ 祈りのある毎日へ 20
- ❧ キャベツのサルマ 20
- ❧ いかにして自らを犠牲にするのか 21
- ❧ 地球：慈悲に触れられた宇宙の片隅 22
- ❧ クルアーンを誦む 24





クルブとブウド(近しさと遠さ)¹

近さ(クルブ)とは、人が完全な精神性を手に入れアッラーに近接するために肉体を超越することを意味します。アッラーの、彼の僕に対する近接性と解釈する人もいますが、これは正確ではありません。アッラーは僕の近くにおられますが、それは質や量の観点からではないのです。イスラーム神秘主義の用法における近しさとは、あらゆる局面や時間の一部分に創造される死すべき存在と関係し、またそれらによって獲得されるものであり、存在の異なる形式や段階を経るものです。アッラーの、彼の創造物に対する近さ、もしくは彼の近くに呼び寄せられることについては、「あなたがたが何処にいようと、かれはあなたがたと共にあられる」(クルアーン 57:4)という節で雄弁にまとめられています。こうした近しさは信仰や善行によって得ることのできる特定の近しさではありません。それはアッラーが彼の僕の近く、それも僕本人の自我よりもより近いところにおられることです。そこには生物であれ無生物であれ、また信仰者であれ不信仰者であれ、そして善悪を問わず、あらゆる被造物が含まれます。

アッラーの創造に対する近しさを意味する一般的な近さが全ての人やものを網羅する一方で、特定の近しさは信仰に依拠し、何であれアッラーが良いこと、正しいこととして命じられたことを実践することによって獲得することができます。全能のお方に対するこの近しさは、近さを得る方法を発見した者、永遠に至る通路に入った者、朝に夕に信仰の新たな奥深い次元に到達する者が持てるものです。こうした人々は「本当にアッラーは、主を畏れる者、善い行いをする者と共におられる」(クルアーン 16:128)で意味されているところに含まれます。この地位を獲得した人々は、息を吸いながら「本当に主はわたしと共におられます。直ぐに御導きがあるでしょう」(クルアーン 26:62)と唱え、息を吐きながら「アッラーはわたしたちと共におられる」(クルアーン 9:40)と唱えるでしょう。

特定の近しさに関して、信仰の意識と完全な善は、視覚にとっての光、また体にとっての魂と同様の価値・重要性を持っています。この意識をもって、義務、そして義務以上の宗教的務めを実践することは、人を無限の「天空」に運び上げる光の翼のようなものです。アッラーへの近しさを得る最も安全で最も好ましい直接的な道は、宗教的義務を果たすことです。しかしながら、制限がなく、かつアッラーへの忠誠と献身を示すこととなる随意的義務以上の宗教的務めを果たすことは真の近しさや、全能のアッラーから愛される地位をもたらしてくれるものです。

アッラーに向かう旅人は、義務以上の務めという翼にのって永遠に至る新しい通路に入り込みます。そしてアッラーからの新たな贈り物を与えられるのを感じ、そのことによって義務と義務以上の務めをさらに果たしたいというより強い願望が生まれます。この真実に目覚めた者はその良心において、本人のアッラーに対する愛と正比例するアッラーの愛を感じます。聖なるハディースでは次のように述べられています。

「宗教的義務を果たすこと以上に私に愛されること以外で僕が私に近づくことはできない。しかし義務以上の務めを果たすことで僕はさらに私に近づき、そして彼が私の近くにいるとき、私は彼が見る目となり、聞く耳となり、握る手となり、歩む足となる。」

¹ この文章が “Key Concepts in the Practice of Sufism” よりの訳です。

要するに、そうした信者はアッラーの意志によって行動するよう導かれるのです。

義務を実践することによって獲得される近しさは、アッラーに愛されているという地位を示す肩書きでもあり、アッラーに愛される者の中に加えられます。義務以上の随意的の務めを果たすことで得られる近しさについていえば、アッラーからもたらされるすべての行為、という地位です。それは、「あなたがた(信者たち)がかれらを殺したのではない。アッラーが殺したのである。あなた(ムハンマド)が射った時、あなたが当てたのではなく、アッラーが当てたのである」(クルアーン 8:17)の節で述べられているようなアッラーからの格別の贈り物であり榮譽であるのです。

アッラーからの特別な贈り物である近しさは、その源がアッラーであることを考慮に入れることなしに、人の行為の成果だと認めることはできません。アッラーへの近しさは、彼の偉大さと慈悲に起因するものであり、彼からの遠さは我々の性格もしくは性質に存在する弱さそして「暗い穴」の一つなのです。「グリスタン(薔薇園)」の著者は、近さと遠さの原因について適切に表現しています。

友は私自身よりも私に近いところにいる

私が彼から遠ざかっているとはなんと奇妙なことだろう

彼が私と共にいるのに、私が彼から離れたところにいるとは

なんと言えばよいのだろう、どうしたらよいのだろう

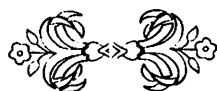
遠さとはアッラーとの距離が離れており、滅びることを意味します。イスラーム神秘主義者によると、遠さの最初の兆候はアッラーからの贈り物が途切れることで、最終的な印は、アッラーからのある特定の援助が訪れない場合にそれを求めている者が完全に道に迷い滅びることです。近しさの度合いが、その人が一般的な信者であるか、聖人であるか、立派で高潔な人物であるか、もしくはアッラーの側に呼び寄せられた人であるかに基づくのと全く同様、遠さについても、滅亡のどん底に位置するシャイターン(悪魔)に落ちていく一連の線上においてそれぞれの度合いがあります。

アッラーへの近しさはアッラーからの恩恵ですが、彼からの遠さは一種の喪失です。しかしながら、人は個人的なアッラーへの近さ、また彼からの遠さというものを常に感じられるわけではありません。アッラーからの最高の恩恵とは、あまりに大きな榮譽を与えられた信者が誇りに感じついにはその恩恵を失うという結果にならないよう、アッラーが(特別な)恩恵(聖人であるとか彼に近いなどの)を感じさせないことなのです。しかし、アッラーからの個人的な遠さに無自覚であることは彼からの報復です。中にはアッラーの愛に酔いしれながらも近きさと遠さの区別をつけなかったり、近きさを所望することもなければ遠さを懸念することもしないという人たちもいます。次の行連句はそうした陶醉した魂の考え方について表現しています。

ジャーミーよ、近しさについても遠さについても思い煩うでない

近きさも遠きもなく、合わも別離もないのだから

遠さが恐怖と喪失を意味することは認められた事実です。しかし、近きさから吹いてくる畏怖の風のためにおののき、アッラーの怒りと破滅に捕らえられたと感じる人たちもいます。王への近きさは燃え盛る炎である、という表現がこの心持ちを表しているかもしれません。それでもなお、近きさがアッラーの親しさや友好さというそよ風が吹き注ぐ楽園の丘になぞらえるとすれば、遠きは剥奪と喪失という穴と考えられるべきでしょう。





布教への熱心さ

10月にぬけていた部分です：

「預言者よ、父が信仰を受け入れることをとても望んでいました。そしてアッラーはそれを実現されたのです。ただ私はアブー・ターリブが入信することを、父の入信以上に望んでいたのです。しかしそれは実現しませんでした。今それを思い出して、泣いたのです」*

ワフシイーへの教えの導き

預言者ムハンマドは、その叔父アブー・ターリブの入信を望んでいたのと同様に、実の叔父聖ハムザを殺害したアビシニア奴隷ワフシイーの入信をも、望んでおられた[†]。何度も強く勧められたのである。この出来事の内容は以下の通りである。

預言者ムハンマドは、叔父を殺害したワフシイーをも、真実の道へと招かれ、ある者を介して手紙を送られた。ただ、ワフシイーは、訪れたその者に次のような手紙を託したのであった。その手紙には次の節が引用されていた。

「アッラーと並べて、外のどんな神にも祈らない者、正当な理由がない限り、アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また姦淫^{かんいん}しない者である。だが凡^{おほ}そそんなことをする者は、懲罰される」(識別章25/68)

ワフシイーは、この節に加えて次のように書いた。「あなたは私をムスリムになるようにと招いているが、私はこの章に出てくる全ての罪を犯しました。多神教徒で、姦淫を犯し、またあなたの叔父を殺しました。私のような者が許されるないだろうし、だからどうしてムスリムになりましょうか？」

預言者ムハンマドは、二通めの手紙を送られた。そこに次の節を引用された。

「本当にアッラーは、(何者をも) 彼に配することを赦されない。それ以外のことについては、御心^{ごこころ}に適う者を赦される。アッラーに(何者かを) 配する者は、まさに大罪を犯す者である」(婦人章4/48)

ワフシイーはその時も、赦されるかどうかははっきりしないこと、アッラーの御心に任されていることにこだわった。それで、この慈悲深い預言者ムハンマドは三度めの手紙を書かれた。そこでは次の章が引

* Ibn Hisham, Sirah 4/48; Ibn Hanbal, Musnad 3/160; Ibn Hajar, Isabah 4/116

† ワフシイーはウフド戦いにおいて、アブースフヤーン^{アブー・スフヤーン}の妻ヒンドにより自由になれる約束でハムザを殺害し、ヒンドはハムザの胸を刺き、心臓をかみしめた。

用されていた。

「自分の魂に背いて過ちを犯したわがしもべたちに言え。それでもアッラーの慈悲に対して絶望してはならない。アッラーは、本当に凡ての罪を赦される。彼は寛容にして慈悲深くあられる」(識別章39/53)

ワフシイーは、この三つめの手紙の後預言者ムハンマドを訪ねた。そして、ムハンマドに誓いを立てた。彼ももはや教友たちの一人であり、彼の名は「ラディアラーフ・アン」をつけずに呼ばれることはない。ただ、ワフシイーはハムザを殺した人物であった。本人も、また周囲も、その事実を忘れることは不可能であった。彼はあの世でこの罪を問われることはおそくないであろう。なぜなら、ハムザを殺した時彼はまだムスリムではなかったからである。ムスリムになった時にそれ以前の全ての罪は赦されたのだ。^{*}その意味で彼は幸運であった。ただ、殺した相手が、ハムザであったのだ。

ハムザは、森のライオンですら彼を恐れた人物であった。彼は預言者ムハンマドのそばでムスリムになった。さらには、ムハンマドの乳兄弟でもあった。彼がムスリムになる以前は、ムスリムたちは常に恐怖の中で生きていた。彼がムスリムとなってからは、彼らの声がアラビア半島に響き渡ったのである。その恐怖の時代にワフシイーは、ハムザを殺したのであった。ウフドの戦いで、手にしていた不運な槍を、聖ハムザの胸に刺したのであった。人生を通して、アッラー以外の全てに「いいえ」と言ってきたハムザは、自分の胸に刺さった槍の上に倒れこむ時、アラビア語で「いいえ」と言う意味の「ラー」字を形作っているようであった。そして地面に倒れた時も、「ラー」字の形であった。少し後、預言者ムハンマドはそれを内臓が引きちぎられるような悲しみのうちにご覧になり、頭のところに座って子供のように泣かれることになるのである。

殉教者は洗われないことになっているが、預言者ムハンマドはハムザだけは洗われ、あたかも水の代わりに御自分の涙で洗っておられるかのようであった。そう、預言者ムハンマドは彼の枕もとでそれほどの涙を流されたのであった[†]。そして今、この殺人者が、預言者に血に染まった手を差し出して、誓いをしたのである。預言者ムハンマドの布教に対する認識をここからも知ることができる。預言者ムハンマドはその殺人者の手を取り、彼の入信を祝福されたのである[‡]。

ワフシイーが信仰を持つようになった後、預言者ムハンマドは言われた。「できれば、余り私に姿を見せないようにしなさい。なぜなら、あなたを見るとハムザを思い出し、あなたのために必要な形で慈愛を示せないかもしれない。そうなれば、あなたも不幸にしてしまうし、私自身も自分の任務をきちんと果たさなかつたことになってしまう」

ワフシイーは、教友の一人という意識をもって、ムハンマドの希望と命令に決して逆らわなかった。常に

^{*} Ibn Hanbal, Musnad 4/199 “人はイスラーム教徒になると信仰のとき起こした全ての罪は許される。”

[†] Ibn Hajar, Isabah 1/353

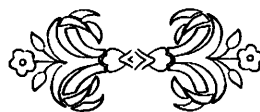
[‡] Haithami, Majma' al-Zawa'id 7/100,101

預言者ムハンマドから遠いところにおいて、自分の姿を見せないように努めた。ただ、常に、預言者ムハンマドからの招きを待ちわびていた。いつかもう姿を見せてもよいと言われる日は来ないだろうか、と言っていた。ワフシイーがその幸せな日を待ちわびている時、その恐ろしい、辛い知らせが彼にもたらされたのであった。預言者ムハンマドが亡くなったのであった。ワフシイーは頭に一撃を受けたようになった。なぜなら、もはやそのお方が再びそばに呼んでくださるという望みは完全に失われたのであった。

ワフシイーのそれ以降の人生は、罪の償いのために存在する。そして、ヤマーマの戦いが起こった。彼はすぐにハーリドの軍に加わり、ヤマーマへ向かった。これは、彼にとって逃すことのできない機会であった。イスラームの勇者たちの一人を殺し、罪を犯したのである。たとえその罪が問われなくても、ワフシイーの良心は地獄のように焼かれているのであった。今、彼の目前にチャンスが訪れているのであった。イスラームの最大の敵ムサイリマを倒すことである。ワフシイーは、ハムザの胸をついた後、しまつて置いた、錆のついた槍をもって、この戦いに挑んだ。戦いは何日も続いた。ムサイリマの軍は苦戦していた。ある時、城の外に逃れようとしているところを見張っていた教友が一人を見つけ知らせた。「見よ、アッラーの敵が行く」。それを聞いたワフシイーはすぐさまその錆の付いた槍を取り、ちょうど、何年前かにハムザの胸を刺したのと同じように、ムサイリマの胸を刺した。彼が馬から落ちるのを見届けると、ワフシイーもその場で平伏して祈った。涙の中で、預言者ムハンマドの魂に「もうあなたのそばに来てもいいですか、預言者よ！」と言っているようであった。

我々は、それに預言者ムハンマドがどのように答えられたかを知ることはできない。しかし、おそらくは、預言者ムハンマドの魂はヤマーマで待っておられ、ワフシイーのこの心からの願いに預言者ムハンマドは慈悲をもって、彼の行動を祝福され、彼の胸に触れられ「もう姿を見せてもいいですよ」と言われたのではないか。我々に知るすべはない。これは段階の問題である。我々がこのハディースを取り上げた理由は、預言者ムハンマドの教えの説き方について明らかにするためである。そう、預言者ムハンマドは、少なくとも自分の父と同じくらい慕^うい、また少なくとも自分の兄弟と同じくらい気にかけていたハムザのような偉大な人物を殺害した相手にさえ、慈悲となられたのである。彼が入信するために50くらいの方法を試みたかもしれない。そしてワフシイーのような人物でさえ、教友とされてしまったのである。

もし、預言者ムハンマドにおいて、教えを伝えるという考えが完成され、その魂の一部となっていなかったとしたら、預言者ムハンマドはワフシイーのような者を熱心にイスラームに導かれていたであろうか？ 不可能であろう。この熱心さには、預言者として布教の精神がその特性となっている事実が隠されているのである。そのため、預言者ムハンマドは、他の行動をとることがおできにならなかったのである。



* Bukhari, Maghazi 24; Ibn Hisham, Sirah 3/76-77



正しさ

正しいことは魅力的で、敗北したとしても喜ばれ受け入れられる。不正は不快さをもたらし、勝利者であったとしても醜い。

正しいことはそれ自体が美しく、正しさを伴っているものも愛らしい。正しいものは泥の中に倒れたとしても輝かしく、清らかである。正しくないものは麝香で洗ったとしても汚らしく、不快である。

色や形が変わったとしても、本質は変化しない。評判や肩書きが変わったとしても、人は変わらない。人々を偽る最たるものは、色や形、評判や肩書きの変化である。

弱い者を押しつぶす者は、勝利者であったおしても敗北者であり、正しい者は敗北者であったとしても勝利者なのである。

真実と公正さ

公正さは、最も強い(ように見える)機甲化された一群よりもなお、強い。

真実があなたの頭上に振りかざされた剣だったとしても、それに対し首を差し出すことを躊躇してはならない。

真実は、それを説明する者と理解する者、それを体現する者と関心を持つ者を見出した時、翼を広げ飛び立つ。

公正さは、どこでも通用する一つの資本である。

公正さは、アッラーへと近づく道の一つであるが、どういうわけか人々はそこから遠ざかることを選択する。

イスラームの城壁は真実であり、扉は公正さであり、内部は幸福である。

公正さが統治している廃墟は宮殿よりもなお尊い。弾圧者の言うがままになっている宮殿は、廃墟よりもなおひどい状態である。

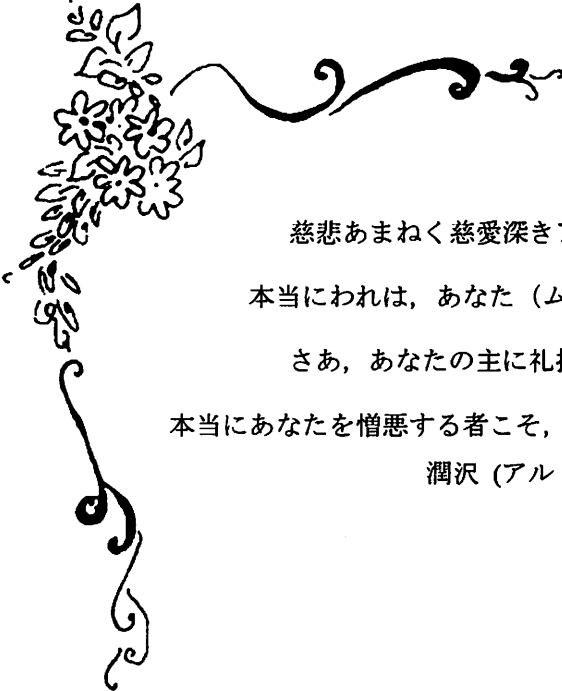
彼方に関しての結びつきが強いことは、真実や公正さに関する考えもまた力強く確かな者であることを意味する。

真実と衝突する者は、遅かれ早かれ、敗れ去る。

他者を苦しめるなら、あなたを苦しめるであろう力が存在することも決して忘れてはいけない。

善と災い

善を施すことは教えと英知の観点からは義務であり、良心の観点からは評価されるにふさわしい振舞いである。善を施さないことは、教えにおいて罪であり、英知の観点からは道徳の水準の低さであり、良心の観点からは無謀さである。善は時には益をもたらさず、さらには一定の損失をもたらすこともあり得るが、決して災いとなることはない。災いは、まさにこの正反対である。



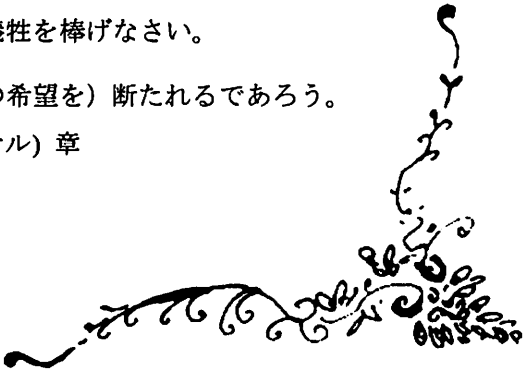
慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。

本当にわれは、あなた（ムハソマド）に潤沢を授けた。

さあ、あなたの主に礼拝し、犠牲を捧げなさい。

本当にあなたを憎悪する者こそ、（将来の希望を）断たれるであろう。

潤沢（アル・カウサル）章





13 番めの光

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。

そして（祈って）言いなさい。「主よ、悪魔たちの囁きに対し、あなたの加護を願います。主よ、かれらがわたしに近付かないよう、あなたの加護を願います。」（信者たち章第97-98節）

1 番目のしるし

質問：シャイターンは、創造には関与しません。またアッラーはそのご慈悲と庇護で真実を見出した人々を守られておられます。そして、真実の美しさは真実を見出した人々に力を与え、助けになります。さらに、逸脱のもたらす醜悪さは、道を誤った人々を憎悪させるものです。

これらにもかかわらず、シャイターンの友である人々がしばしば勝っており、また信仰する人々が、常に、シャイターンの災いからアッラーに庇護を求めていることの原因は何でしょうか。

答え：そこにおける英知と意図は以下のとおりです。逸脱と悪は、ほとんどの場合、否定的であって、破壊的であり、無をもたらすものです。導きと善行は、ほとんどの場合、肯定的で、建設的で、損失を補修するものです。

二十日かけて二十人の男性が作った建物を、一人の人が一日で破壊することができるのは、周知のとおりです。様々な器官と生存のための条件が存在することによって成り立つ人の生命は、崇高なる創造主のお力によるものですが、一人の暴虐者が一つの器官を切り裂くことで、生というものに比較するなら「終焉」である、死が、その人に訪れるのです。だからこそ、「破壊は簡単である」という表現が、ことわざとして用いられるのです。

道をそれてしまった人々が、ほんの少しの力で、強い力を持つ信仰する人々を打ち負かすことがあるのはこのためです。

しかし、真実を見出した人々は、非常に強固な要塞を持っているのです。人々がそこに庇護を求め避難した時には、敵は近づくことができず、何も手が出せないのです。もし、一時的に何か害を与えたとしても、「最後は（主に対し）義務を果たす者に、帰するのである。」（高壁章第128節）に秘められた真実のとおり、永遠の善行、利益によってその損害は帳消しにされるのです。

そして、その強固な避難先とは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のシャーリアと、スンナなのです。

2番目のしるし

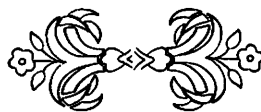
質問: 完全な悪である悪魔の創造、そしてその存在が信仰する人々を惑わせること、そのせいで多くの人々が教えに対する憎悪を抱き、地獄に落ちてしまうことは、恐ろしく、醜いことのように見えます。絶対的な美、絶対的な慈悲、真の慈しみの持ち主であられるお方は、なぜ、この無限の醜さとすさまじい災難の存在を許されるのでしょうか? 多くの人々がこの質問に関して尋ねてきましたし、多くの人々の心に浮かぶ問題となっています。

答え: シャイターンの存在には、小さい弊害と並んで、普遍的な善や、人間性の完成といったよい面があります。そう、種子から巨大な木まで、多くの段階が存在するように、人間の力にはさらに多様な段階が存在するのです。おそらくは、微粒子から太陽にいたるほどの段階があります。これらの能力と可能性が引き出されるためには、行動や活動が必要となります。行動や活動における進歩は、努力することで引き起こされます。そして、努力は、シャイターンや、有害なもの存在によって発生します。さもないと、人間の段階は、天使のそれのように一定だったでしょう。何千もの種に値するような、人間の多様な段階は存在しなかったでしょう。

一つの小さい弊害を避けるために、千の利益を放棄することは、神の英知や公正さに反することです。確かに、多くの人々がシャイターンによって道を誤ります。しかし、重要性和価値は、ほとんどがその質によるものであり、数によっていることはほとんど皆無なのです。1,010個の種子を持っている人がいたとして、土の中で種子が化学反応を受けて、その結果、十の木が育ちと千の種子が腐ってしまったとします。その人が木に育った十の種子から受け取る利益は、彼が千の腐った種子から受ける損失を、ゼロまで減少させます。

だから、我欲やシャイターンに対する奮闘によって、星のように人類に誇りを与え、輝かせる十人の人の存在によって、その集団にもたらされる効果、名誉、価値は、逸脱した人々が、教えに対して憎悪を抱くことによって人類に与える害を、ゼロにまで減少させ、視野から消し去るため、アッラーの慈悲と英知と公正さは、シャイターンの存在を許し、それが人々に害を与えることを許したのです。

信仰する人々よ。このすさまじい敵に対するあなたのよろいかぶとは、クルアーンという作業台において作られる、アッラーへの畏怖の念です。そして、あなたの盾は、預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)のスナナです。あなたの武器は、シャイターンに対してアッラーから庇護を求めること、許しを乞うこと、アッラーの保護のもとに救いを求めることなのです。





『UFO 少年アブドラジャン』

Абдулладжан, или посвящается Стивену Спилбергу

もう少しで犠牲祭がやってまいります。昨年は本当に年末と重なったため、一般的日本より早くお正月気分を味わってしまい、家に帰ったころには日本的な年末気分はサッパリありませんでした。今年は年末から少しずれるので、また違った経験ができるのではと思います。

さて、今回は犠牲祭とはあまり関係がありませんが、ちょっと変わった「良きムスリム」の出でくる映画をご紹介します。

宇宙開発に力を入れるソ連（当時）の一部、ウズベキスタンの片田舎。モスクワから「そちらに未確認飛行物体が向かっているから注意せよ」との連絡が入るも、村人たちは信じていない。しかし、村人バザルバイは奇妙な円盤が墜落する現場を目撃。円盤に近づくと、顔立ちのととのった少年が倒れており、どうやらこれが宇宙人らしい。バザルバイは祖父の名前「アブドラジャン」を少年に与え、7番目の子供として育てるため家へ連れて帰る。

アブドラジャンは無邪気に義父母や村人たちのために奇跡を起こし続けるのだが、議長だけがなぜか恩恵に預かれない…。

とても地味な笑いを誘う映画です。まず「E.T.を見て感動したので、わが村で起きた不思議事件についてもぜひ知ってほしい」と、ステイーブン・スピルバーグ監督に向けた手紙を朗読するという形を取っているところからおかしいし、米ソのスペースシャトルが宇宙で交わす挨拶が「アッサラーム・アライクム」なのも面白いです。

この映画の設定では、バザルバイは「よきムスリム」ということになっています。まあ、出てくる人に悪い人が一人もないので、みんなそうなのだろうとは思いますが、その共同体の中でもそう思われている、という点で特異な存在です。アブドラジャンを家に迎え入れようとバザルバイが決めるのも、「助けてあげよう」とか「いいことがあるかも」とか「かわいそう」とかそういう感情があまり無く、ただただ「裸だし、必要なものを揃えてあげて、ついでに家で一緒に暮らそうか」というくらいのノリなのがすごいところで、物事をおおらかに受け入れすぎです。しかも、家族にも「UFOが墜落して、これが乗

っていた宇宙人なんだよ」と話せばいいのに、事情を全く説明せず連れてきたものだから、妻は浮気相手（何故かロシア人と決めつけられる）の子と思い大パニックになるし、子供たちには「お父さんサイテー」と蔑まれることになってしまいます。でもバザルバイは「空からのお客さんなんだぞ！別にいいじゃないか！！」と主張するのみ。一切事情は説明しません（空から、というので説明した気になっているのかもしれませんが…）。結局7番目の子供と一緒に暮らすことになるのですが、村人たちもそれをおおらかに受け入れ、「（バザルバイは）真面目なムスリムなので、ロシアからの子供にも平等に愛情を注ぐように」との聖職者の見解まで出ます。見知らぬ者に無条件でこんなにも親切にできるのか！？と驚きます。もちろん映画だからというのもあるのでしょうけれど、理想を描いている雰囲気でもないですし、実際ムスリムの方々の手厚いもてなしを受けたことがある人々にとっては、この対応は経験的に納得出来ることではないでしょうか。もちろん宗教のスタンスだけでなく人間性などもあると思いますが、自分はこうは出来ないなあと思ってしまいます。

人をおおらかに受け入れるだけでなく、さらに様々な出来事に対して「まじめ」な対応をし続けるバザルバイ。完全なる善人ではない彼ですが、そこがまた人間らしく、いいところなのでしょう。村人たちもアブドラジャンとともに楽しく過ごしていきます。

そして圧巻なのが「なぜ議長だけがアブドラジャンの奇跡の恩恵にあずかれないのか」という理由です。ここでそれを公開してしまうと、見た時に面白くないので書きませんが、これもとてもムスリムらしい理由です。イスラームなど何も知らずに見たら「へえー」で終わるかとも思いますが、ムスリムには「あっ！なるほど」と気付くことがあるかと思えます。

ムスリムが出てきて、その良い特質がうまく活かされている映画というのは初めて見たように思います。かたい話でもないですし、押し付けがましくもないです。この映画のユルさというか、微妙な雰囲気醸し出す面白さは子どもにはわからないかもしれませんが、出てくる人皆がいろいろなことに一生懸命だし、前述の通り悪人は一人も出てこず、変なシーンもありません。そして全くダレない話の展開ですので、ぜひ子供と一緒にも見たい映画でした。

『UFO少年アブドラジャン』 1992年（製作は1991年） ウズベキスタン 88分

監督：ズリフィカール・ムサコフ

出演：ラジャブ・アダシェフ／トウイチ・アリポフ 他



地上の良心 カーバ

ラマダーン月の短期間のウムラのため、預言者たちを生み出した土地・中東の大地にあって、最後の、そして最も尊い預言者であるムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)のキブラが存在するマッカへと向かい、私たちは「ラッバイク アッラーフンマ ラッバイク ラッバイカ ラー シャリーカ ラカ ラッバイク インナルハムダ ワンニヤマタ ラカ ワルムルク ラー シャリーカ ラク」と唱えながら進んでいきます。

マッカは、クルアーンの表現によるなら、全ての村や町の母なのです。アッラーのために造られた家、最初の礼拝所であるカーバが、ここにあるのです。アダムにより、人類はここから始まったのです。ヌーフの洪水は、このバイティ・マームル（天の第七層にあり、周囲を天使たちが周回しているとされている礼拝所）の、地上における投影の地を失わせました。預言者達の父祖イブラーヒーム（彼の上に平安あれ）は、最後の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の父祖となるであろう息子イスマーイール(彼の上に平安あれ)と共にカーバを再築しました。アッラーの「人びとに、巡礼〔ハッジ〕するよう呼びかけよ。かれらは歩いてあなたの許に来る。あるいは、どれも痩せこけているラクダに乗って、遠い谷間の道をはるばる来る。」（巡礼章第27節）というご命令に従い、アブー・クバイス山に登り、全ての人々に呼びかけ、この呼びかけを実現したのです。

この呼びかけを、まだ魂の世界にいる人々ですら聞いたのでしょうか。イブラーヒーム以来何千年もの後、イスラーム教徒たちが「ラッバイク アッラーフンマ ラッバイク〜」、すなわち「アッラーよ、私はあなたの呼びかけに応じます。あなたに比類すべきものはありません。あなたに配すべきものはありません。感謝と賞賛はあなたのためにあります。あらゆる恵みはあなたからもたらされます。あらゆる財産はあなたに属します。あなたには同位者はありません。私の全ての崇拜行為と服従はあなたへのものです、神よ！」と唱え、この壮大な、そして深い、イブラーヒームの呼びかけに従い、カーバへと駆け寄っているのです。

イブラーヒーム(彼の上に平安あれ)の息子イスハク（彼の上に平安あれ）の血筋から生まれたムーサー(彼の上に平安あれ)への啓示がシナイ山で下され、シナイ山が祝福された聖なる土地となったように、そしてムーサーがアッラーに近づき、近しさを得るために聖なるトゥーワの谷で靴を脱いだように、全ての人々、全ての時空に関わる普遍的メッセージであるクルアーンは、そこよりもなお尊い土地であるカーバのある土地から響き渡ったのです。終末の世のウンマの人々もまた、近しさを得るために、イブラームの状態

でカーバへ来るが必要なのです。

町や村の母であるマッカにあるカーバの真実と、被造物の最初の光、そして人類の中心である預言者の真実とには、強い結びつきがあります。これらは双子として、同じ胎内に宿ったのです。

イスラームにおける復興運動においても、カーバとムハンマド(彼の上に平安あれ)のこの面を理解することが非常に重要な基準となります。フェトゥフッラー・ギュレン先生はこの点について次のように述べておられます。「新たな復活運動と、カーバの、人間にとって保護される聖域であるという特性との間には強い結びつきがある。復活がどのような段階で実現するかという基準は、カーバの真実の理解に応じた割合となる。いつかこの割合が最高点にまで達すれば、復興もまた最も高い段階で実現するだろう。」

またアッラーは、「アッラーは人間の（現世における平安の）ため、聖なる家、カーバを創り、」（食卓章第97節）と仰せられておられるのです。

人の良心が、幽玄界からもたらされるものとこの目に見える世界の間の交差点であるように、そしてこの双方を見通す地点に存在しているように、カーバもまたこの世において、幽玄界と目に見えるこの世界の間の交差点であり、双方が出会う場でもあるのです。地球の心であるカーバは、常に人々の目の光、足を支える力、思いや感情の力と活気の源となったのです。信仰する人々の教えと世界は、それによって調和を守り、それはちょうど、人々の心のためのバランスという役目をいつでも果たしてきたのです。アッラーへと方向付けられた人々はそれによって方向付けられ、礼拝や巡礼はカーバとの深い結びつきの中で実行されてきました。確かさを求める人は、そこやその周辺で起こった事柄を熟考することによって平穏と充足を手にしてきました。望郷の思いに泣く人は、そこで慣れ親しんだ息吹を感じ、恐怖から逃れることができました。カーバは、心からスイドレトゥル・ムンテハー（被造物の世界の最後の地点。天の第7層にあることが伝えられている）へと延びる線上にあり、一つのミフラブ（礼拝の方向を示すもの）であり、ミフラブの彼方であり、また諸世界や全ての空間の、地球の神聖なある地点における、石の形をした最も意義のある声なのです。アッラーがその保護を私たちに欠かされることなくお与えくださいますように。

復興の若い次世代に、カーバの真実を最大限理解できる認識をお与えくださるよう、アッラーに願います。

開いては閉じる花芽

私たちが礼拝をする方向である偉大なるカーバは、そもそも世界ほどの大きさのバラの芽の、ちょうど中央にある黒い点なのです。

地球上ではどの瞬間にも、日に五度の定時の礼拝が行なわれており、地球のあらゆる方向から、偉大なるカーバに向かって礼拝を行なうイスラーム教徒たちが作り出す、同心円のような形でカーバを取り囲む多くの礼拝の列、開きまた閉じるバラの葉のような、クヤームやルクーやサジュダによって継続的に動きや活気が行なわれているのです。礼拝は、五つの、もしくは五色をした一つのベルトのように世界をとらえ、しっかりと天に結び付けます。その結びつきが解けた時、それはこの世が終わることを意味するのです。

天使たちは天にあって、バイティ・マームルを周回しています。カーバもまた、バイティ・マームルと同一線上にあることにより、その投影として信者の周回が望まれているのです。アッラーはアードムさまに、「アードムよ、地上における私の家は、天における私の家と同じ線上にある。天使たちが天で周回を行なっているように、あなたやあなたの子供たち、子孫たちもまた、地上における私の家で同じように周回を行ないなさい。」と命じられました。

クルアーンでは、「本当に人々のために最初に建立された家は、マッカのそれで、それは生けるもの凡てへの祝福であり導きである。」(イムラーン家章第 96 節) と仰せられているのです。

神の英知に従順に従ったイブラーヒーム (彼の上に平安あれ) が、妻のハジャルと息子のイスマーイールを、耕作には適さない、石だらけの土地に残して去った時、妻ハジャルは夫が神の命令が求めるところとして行なったこの振舞いを、神への信頼によって受け入れました。しかし座り込んで待つのではなく、水がなくなってしまった後には、飢えと渇きで泣いている息子イスマーイールに飲ませる水を見つけるため、彼を現在のカーバのそばに残し、サファーの丘の方へと歩き始めました。しかし目はイスマーイールに残していました。なぜなら野生動物が奪い去ってしまう危険性すらあったからです。窪地になっているところを通る時には、イスマーイールの姿を見失わないよう急ぎ足になって歩き、その目を聖なる息子から離さず、進み続けたのでした。今日私たちが七度行き来してサーイを行なうのは、この出来事の象徴なのです。緑のしるしの間では素早く行動して走ることに、このことを現し、思い起こさせるものである、と伝えられています。

ハジャルが、自らに課せられたことを成し遂げた後、天から声がし始めます。そこから現れた天使

ジブラーイール(彼の上に平安あれ)は、ハジャルがまだマルワの丘にいる時、現在のザムザムの泉のそばにやってきます。ハジャルは最初に、一つの声を聞きます。注意深くしていると、二つ目の声が聞こえます。「あなたの声を聞きました。もし私たちを助ける力を持っているなら、助けてください。」といいます。それに応じて姿を見せたジブラーイールが、その翼もしくはかかとで地を打つと、水が現れます。ハジャルは急いで駆けつけます。そして流れていってしまう、という不安から、「ゼマーゼム」、すなわち「止まって、止まって!」と呼びかけます。そしてその流れていってしまわないようにとその周囲を囲みます。この聖なる水を「ザムザム」と呼ぶことに関して伝えられている話が、まさにこれなのです。

ジブラーイールはハジャルに、「決して破滅してしまうと恐れてはいけない。そう、ここがアッラーの家となるのだ。この子供とその父がそれを建設するだろう。アッラーはこの聖なる仕事を行なう者たちの一族を滅ぼされない。」という吉報を伝えます。ザムザムの水は、ハジャルが飲むだけではなく息子にも与えられました。その水は他の水とは異なる、栄養成分を含んだものでした。ザムザムの水は、糧として、あるいは健康のためにも飲まれます。教友たちの中にも、ザムザムの水を飲むだけで、体がいい状態となった人々がいました。

その後、実際にイブラーヒームが息子イスマーイールを訪ねてきた際に、カーバの建設の命令が下されたことを伝えます。そのようにして父子は、今日のカーバの土台を築き、それを高くしていったのです。一定の高さに到達した後、イブラーヒームは一つの石に足を載せ、それを足場とされていました。この石にはイブラーヒームの足型が残っており、現在でもカーバで保存されています。

多くの記憶や軌跡を抱いているカーバは、増え続ける訪問者、その誉れ、崇高さとともに、アッラーの教えへと導く案内の役割を果たし続けているのです。

マスファラ・バスマラ・サウル

マッカで、バス一台分のウムラを行なう人々と共に、観光に出ました。「この通りは、」とガイドは説明してくれました。「ハリル・イブラーヒーム通りです。ここはマスファラと呼ばれるところです。マスファラとは、下の方の土地、という意味です。ここはマッカの下方に当たります。」

まず私たちは、サウル山に立ち寄ります。カーバへ約4キロ、高さは500メートル程度の山です。預言者ムハンマドは、道を共にしたアブー・バクルとマッカからマディーナへと移住することを決められた際、ここに隠れたのです。三日後には、紅海沿岸を経て、マディーナに到着したのです。サウルの洞

窟は、本来マディーナとは反対側の方角にあります。預言者ムハンマドは、ご自身を殺害しようとし、また捕まえた者に100頭のらくだという報奨を出していた多神教徒たちを、この別方向という戦略で戸惑わせられたのです。

カドゥ・イヤズによると、アブー・バクルと預言者ムハンマドはまず、サビルという山に登られました。サビル山は「アッラーの使徒よ、私から降りてください。もし彼らが、あなた方を私の上で見つければ、アッラーは私を罰せられるだろう、と恐れているのです。」と伝えました。それに対しサウル山は、「アッラーの使徒よ、私に来てください。」と預言者に呼びかけたのです。そしてこのために、心を持つ人々の一部は、サビル山で恐怖感を感じ、サウル山では安心感を味わうのです。

預言者ムハンマドがアブー・バクルと共にサウルの洞窟に隠れておられた時、一匹の蜘蛛が、洞窟の入り口にカーテンのような巣を張りました。二羽の鳩も、門番のようにその入り口にどまっていました。

クライシュ族の有力者たちが追跡して来た際、ウバイ・イブニ・ハラフは洞窟を見つけましたが中に入ることを望みませんでした。その友人たちが入ることを提案した時も、「どうして入る必要がある？ここには蜘蛛の巣があるが、これはムハンマドが生まれるよりも前に作られたものだろう。ここには二羽の鳩もいる。中に人がいれば鳩がこんなところでじっとしているわけがない。」と応えたのでした。

ここで、クルアーンの奇跡が実現されたのです。

聖遷以前にマッカで啓示された蜘蛛章では、次のように述べられていました。

「アッラーを差し置いて外の主人を取る者を譬えれば、(自分で自分の)家を作る蜘蛛のようなものである。本当に家の中でも最も弱いのは、蜘蛛の家である。かれらに分っていたならば、よかったのに。」

ここには、マッカの多神教徒たちが、そもそもは最も弱い家である蜘蛛の巣によって敗れることへのサインが秘められています。つまり、「これらがかれらに分っていたら、このような殺害計画を企てることもなかっただろう。」と述べているのです。

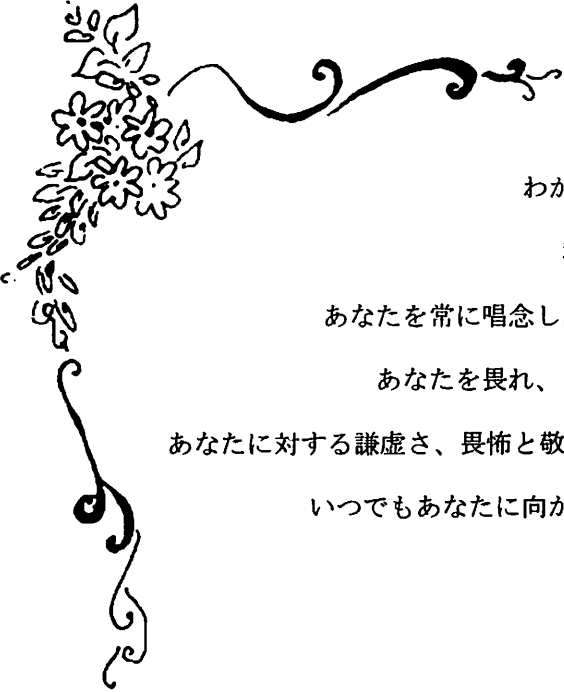
この章句を詳しく見ていくなら、非常な繊細さでいくつかの真実について言及していることが読み取れます。まず、アッラーから去り、それ以外のものを親友とし、アッラー以外のものに庇護を求めようとする人々を具現化しているのです。なぜなら蜘蛛は、自分の巣にかかった昆虫類を食べるものです。さらに

巣を張ったメスの蜘蛛は、オスの蜘蛛ですら、交尾直後に食べようとします。多くのオス蜘蛛は、足を食べられてしまうのです。そう、アッラー以外のものに庇護を求める者の、悲惨でいたましい状況を、こういった例よりもよりよく表現することは不可能でしょう。

この章句では、巣を張る蜘蛛がメスであることが、ここで用いられている「イッタハザトゥ」という言葉から、すなわち女性であることを示す文法上の形式から、明らかになります。もしオスの蜘蛛なら「イッタハーザ」となる必要があるのです。科学的な観察の結果、何千種もの蜘蛛の全てで、メスが巣を張っている、ということが明らかになっています。

この章句では、蜘蛛の家がとても弱いものであることが示されています。しかし、糸としてはありません。この表現には、興味深い留意と選択が存在します。なぜなら蜘蛛の巣は、言えとしては弱く、もろく、決してよいものではありませんが、糸としては、同じ太さの鋼鉄製の糸よりも七倍強いのです。

そう、私たちはそのようなことに思いを巡らせながら、サウルの洞窟を眺めているのです。。



わがアッラー

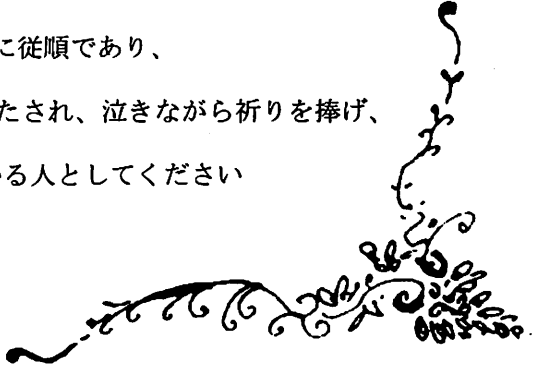
私を、

あなたを常に唱念し、あなたに大いに感謝し、

あなたを畏れ、あなたに従順であり、

あなたに対する謙虚さ、畏怖と敬意で満たされ、泣きながら祈りを捧げ、

いつでもあなたに向かっている人としてください





恐れるもの達が逃げ込む場 罪びと達が避難する拠り所

悔い改める者達が心と傾けるお方 反抗する者達が避難する拠り所

この世におぼれぬ者達が乞い求めるお方 過ちと犯すもの達が希望を求めるお方

かれを求める者達に親しくあられるお方 情け深い者達を眷められるお方

頼る者達が、唯一信頼するお方 信仰に満ち溢れた心の持ち主者達に安らぎと与えるお方

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、

あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。⁸



キャベツのサルマ

材料(中に詰めるもの): 玉葱 大2 トマトペースト 大匙 1 砂糖 大匙 1 オリーブ油 大匙5
 米 1カップ ミント 小匙3 シナモン 小匙 1 塩 小匙3 こしょう 少々
 キャベツ 25枚ぐらい(1個) 塩 少々 オリーブ油 大匙1 レモン汁 少々

作り方: 米は洗っておく。玉葱を細かくみじん切りにし炒める。そこに米を加えて炒め、トマトペースト、塩、砂糖、こしょうを加えて炒め水を3/4を加えて蓋をする。中火で 沸騰したら火を止めミント、シナモンを加えて置いておく。キャベツの芯ををとり、キャベツを1枚1枚はがす。はがしたら、沸騰した湯に入れる。しんなりしたら取り出す。水を切り冷ます。キャベツの葉を広げ、中身を入れる。それを巻いておく。中身がでないようにそれを鍋に並べ、オリーブ油、レモン汁をかけて、水1カップ入れて弱火で35分煮る。冷まして食べたら美味しいです。

⁸ジャウシャン・カビール（偉大なる鎖帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り）には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。 ジャウシャン・カビールのアラビア語/日本語訳オーディオ CD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>



犠牲と聞くと、何となく後ずさりしてしまうような、ちょっとこわいようなそんな印象を受けるかもしれません。手持ちの辞書には、犠牲の意味の②として、身命を捧げて他のために尽くすこと。ある目的を達成するために、それに伴う損失を顧みないこと。とあります。つまり自分ではない何かに自分が尽くし、さらにはその損失を顧みないということのようです。こうしてみると、犠牲とはある程度の強い熱意が伴わないとできない行為であるように思えます。人が何かに尽くすという場面は多々あります。仕事に尽くす、趣味に尽くす、家族に尽くす、勉学に尽くす、スポーツに尽くす、などなど。こうしてみると、何かの目的をもって尽くしているようです。

例えば、仕事に尽くすのは、キャリアを積むため、社会に認められるようになるため、お金を稼ぐため、ある信念を貫くため、社会貢献のため・・・目的はいろいろあるようです。仕事に尽くすといってもその目的は一概にはいえないようです。

私が信仰するものにおいては、目的を常に尋ねられているようなそんな気がします。あらゆる行動について常に問われているという意識から、ついつい自分で自分に問いかけてしまいます。「私は何の目的のためにコレ（何らかの行為）をしているのか？」

人生、(現世でも、この世でもいいですが) という期間に、どの目的のために

自分のこの時間を充たさせるか、つまり自分の時間を犠牲にしてどんな目的を達成したいのかという問題へとつながっていきます。ある人にとっては、富を得て生活に不自由のない生活を送ることがその目的となります。またある人には、自分のしたいことを残らず実行するということかもしれません。その目的の設定のしかたで、人生の生き方もそれぞれの姿をみせます。

目的の設定の仕方、人生の様子も変わるということがいえます。しかし、その目的は必ずしも意識されて設定されているとは限りません。多くの人は、「人生ってなんだろう」といった疑問や、人生の目的にあいまいさを持ちながら生活していると思います。その人生の目的の設定の仕方によっては、人生が一変します。それはほとんど劇的といってよいほど一変することがあります。

私の場合、人生は限られた期間だということから、好きなことを、自分のしたいことをできる限りしようという目的がありました。それは次第に、家族や友達に愛を示す、あるいはその人間関係を大切にするという目的に変わりました。そして今は、それも越えて好きなこと、自分のしたいことはすると思えますが、家族や友人関係はもっと重視したい、でもそこに信仰というものが加わり、家族さえも介入できない自分の人生というものがあるということ、それが新たな目的となりました。新たな目的を意識するからといって家族や友人をないがしろにするのではなく、むしろ信仰から派生的現れるような愛情は以前のそれよりもはるかに大きいものとなりました。犠牲祭という機会に「犠牲」という言葉を人生と照らし合わせて考えてみました。目標がぶれると、それに伴う行動もぶれてしまいます。その行動が人生というわけです。私も今一度、人生の目標を肝に銘じたいと思います。



生態系の働きの価値は、最近、1年で合計33兆ドルになるとの計算が行なわれました。(Nature誌、1997年、387号、253ページ)しかし実際にお金で私たちの生命線を買うことが出来るでしょうか？それは、当然視されるべきではないような、値段など付けられないほど価値のあるものではないでしょうか？

マリーランド大エコロジー経済学会のディレクターであるロバート・コスタンザに率いられたグループは、私たちが自然において享受しているものの費用を算出しました。水や空気、土や動物からの栄養、大気中の酸素や窒素や二酸化炭素が最適な濃度で、最適な割合で維持されることといったような地球上における奇跡的な生命の維持に関わる無数の過程の中で、次のようなものも私たちの存在には不可欠なのです。

●熱帯林の中の未知の植物の葉や花卉、もしくは皮に秘められている、それまで発見されていなかった、不治の病のための治療薬。

●昼と夜の絶え間ない継承。それにより、日光をとおして植物によって大量に生産される、動物の呼吸に必要な酸素。

●干ばつと飢えに打ちひしがれていた風景が、数日のうちに豊かな緑へと変えられ、外見上生命が与えられる、雨の効果。

●何よりも、太陽から発されているエネルギーの規模や相場は値段をつけることなどできないものです。なぜならそれは、たとえほんの一部であろうと、地球上で獲得することがほとんど不可能であるからです。

もし私たちが立ち止まり、顕示されているものを通して、与えられているものについて熟考するならば、私たちは、自分たちの体のシステムが自由にされたサービスであると理解できるでしょう。私たちの体は、文字通り、受精の時から最後に息をする時まであらゆるポイントにおいて、私たちの自発的な介入なしに機能します。これは確かに、熟考する人々にとっては驚異であり、理解する人々にとっては奇跡なのです。この明白な、神聖な、驚嘆の念を起こさせるような私たちの状態は、無視するべきものでもなければ、貨幣価値で判断して値段を付けるようなものでもないことは明らかでしょう。しかし、私たちが取り組むべきより重要な問題は、次のようなものです。すなわち、私たちの命の維持のための、これほどに貴重なサービスを考慮するならば、その貴重な信託を悪用、誤用することはどのような影響を及ぼすか、という点です。

オレゴン州立大のある海洋生物学者によって述べられているように、「この計算は私たちを目覚めさせ、細心の注意を払わせるのに十分なほど、驚異的」なのです。(New Scientist ,2082号、1997年5月17日)

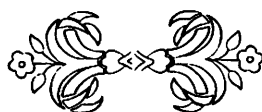
加えて私たちは、このような恵み深い、驚くべきサービスがなぜ人間に与えられ、権利下に置かれているのか、問いかけてみるべきでしょう。もし私たちが自分たちを「最も進化した種」と見なすのであれば、その場合、私たちが「自然」と呼ぶ作用が、絶対的な力、知識、そして私たちの必要性を理解しそれを供給することができるだけの、私たちの理解を超越した知性を持っていることが必要となります。私たちが簡単に切り倒すことができる木が、私たちの視覚や味覚を喜ばせるだけでなく、栄養上の必要も満たしている果実を実らせることができるような知識を持っている、と主張することができるでしょうか？あるいは、人間の干渉によって簡単に傷ついてしまう自然環境というものが、生命の源であると主張することは可能でしょうか？

つまり、いわゆる「自然現象」と呼ばれるものは、人間の生命を保持するだけの知識を持ってはいないのです。それは高度に、生物学的、社会学的、心理学的に複雑なものなのです。従ってこれらの、生命を持たない作用は、非の打ち所のない正確さで、あらかじめプログラミングされているのです。それらの存在は明らかに、私たちの管理外にあるのです。

だから人の存在は、非常に明確な、特別な目的のためのものであるに違いありません。

人は生涯を通し、彼に与えられた手段によって成長し、発展します。彼はその手段に絶対的に依存しており、それはまた彼が持っている限られた機能を超越したものなのです。人はいかにその享受しているものを重んじ、それらを意図された、創造の目的に適った形で用いるべきなのでしょう。

心や知性といった非常に高度な能力を与えられた以上、人の本質的な義務は、その意識的な恩義や、彼の周囲でその手段となっている世界を理解するという多大な責任を伴います。自らを律し鍛錬することを通し、彼は当然の敬意や謝意を、気前のよい恵みに対し示すべきでしょう。それは、そういった作用ではなく、あるお方によって彼に与えられているものなのです。人の責任は甚大なものです。しかしそこには、大きな報奨があるのです。人はもともとその恵みにふさわしい形で創造されています。あとは彼自身が自らをそれにふさわしいものとするか否かなのです。





フズン（悲愁、時に涙があふれ出るような魂の^{こころ}昂揚を伴う悲しみ）とクルアーンという2つの単語はまさにお互いを補完しあう言葉です。クルアーンはフズン（魂の昂揚を伴う悲しみ）と共に下されました。アッラーの御使い（彼に祝福と平安あれ）は、あるハディースでこの事をお示し下さいました。「高貴なるクルアーンのももよい誦み方は、涙があふれ出るような魂の昂揚を伴う悲しみの中で真剣になされる読誦です。」私の個人的考えでは、魂をこめず、クルアーンを誦むことによって、人間の感受性が失われていきます。クルアーンを理解すること、クルアーンによって蘇生することは、本質的に、クルアーンとの繋がり^{つなぎ}の深さにより、皆それぞれ違ってきます。クルアーン^{クルアーン}の文や発音だけを気にかける方々は、報奨を得ることができたとしても、その報奨は明らかにまとまった形では与えられません。又、その他の方法ではクルアーンをその内容にふさわしく理解し、実生活で生かすことはできません。そうです、クルアーンとの関わりにおいて本質的に大切なことは、心、意識、意志の力（意欲）、理解力、感覚のすべてを、クルアーンに集中させ、私達の心の中の^{こころ}著りやうぬぼれの気持ちを消し去り、彼（アッラー）を感じる事ができるかどうかということなのです。このような方向性や感じ方によってのみ、アッラーが私達に仰（おお）せられたことを感じ取れるのです。水や光に触れた胚芽のように、一瞬に、私達も芽生え、双葉を出すでしょう。私達が読誦する節の一つ一つの単語や文は、それぞれに様々な深さ（奥行き）を持ち、私達の魂を図面に表わしたように、私達はよく魂を眺めることができます。また同時に、天空の図をも観察できます。

私の無力な思考力では、クルアーンを誦む時、完全な意味を知りえることができません。そのため、この事には大変真剣に取り組む必要があります。なぜならクルアーンを規則に則って誦み、それを心で感じ、その意味と内容をよく知ることは、その深さ（奥行き）を増していくのと同じくらい大切な事だからです。言葉や文章とはその意味と内容の外型であり、外型が悪ければ、その意味も押しつぶされてしまい、その深さに影響を及ぼす事はできません。たとえば私の場合、クルアーンを傾聴する時、誤った誦み方に対して、魂が苛立ち落ち着きがなくなり、私の集中力は失われ、その意味の深い部分から遠ざかるような状況が起こります。クルアーンを完全に集中して聴き、感じる事を望む方々は皆、私と同様に、苛立ちと落ち着きのなさを感じることでしょう。

そうです、クルアーンはアッラーから長ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）に、そしてジブリール（彼に平安あれ）から人類の中で最も讃えられるべきお方（彼に祝福と平安あれ）へ、それから、長達の中の長であられるムハンマド（彼に祝福と平安あれ）から教友達へ読誦されたように、誦むべきです。ジブリール（彼に平安あれ）はアッラーの御使い（彼に祝福と平安あれ）と共に、「クルアーンが啓示されたように、

守られているだろうか？正しい形で誦まれているだろうか？」と毎年、「ムカーバラ」していました。これに関してはハディースを参照し、ムカーバラを「照合する、共に誦み聴く」と訳すことが可能です。確かにこれは私達に与えられた重要なメッセージでしょう。

御望みならば例を挙げてみましょう。礼拝を感じることに、良い心を感じながら立礼(ルクー)にすること、彼の御前に在るがごとく意識することが大変重要です。しかしながら、これと共に、礼拝する時のルクー、サジダ(叩頭)、キラート、キヤーム(直立姿勢)、タシャップド(祈り、誓いのことば)のような形式に則った方法に従う事も大切です。クルアーンを誦読方法にしたがって正しく誦むことも、礼拝の形式に則った方法と同様に、高く価値付けすることができますね。

クルアーンを正しく誦むために、3点大切なポイントを挙げます。

- ☞ 第1点は、正しい誦読のし方を身につけた先生のラフレ(クルアーンを置く書見台)の前に座する事。つまり、必ずその道の熟達者から授業を受ける事です。クルアーンを誦むことは、ただ単に文字を知ることではありません。私は以前フランス語を独学で学んだことがあります。確かに学びましたが、どのように発音していたかはアッラーのみをご存知でしょう。また或る時、英語も学びましたが、或る日、故ツジジュ ジャーヒド氏は私に「我が師よ、トルコ語のように英語をあなたは話していらっしゃるね。」とおっしゃられました。その日、私は英語を学ぶことを止めました。文字と単語は基本的に忠実に発音するためには、熟達者の前で正座して学ぶことが必要ですから・・・
- ☞ 第2点は、訓練する時、正しい発音のために自分自身を鍛える事(多少無理しても正しい音を出すように努める事)。たとえば、文字の発音をする時、私達の誦読の先生は彼自身や私達が無理にでも正しい音を出させるように努めていました。たとえば彼は「ダード」の文字を示される時、指を舌の上に置いたものでした。これは始めの頃は強制されているような感じがしますが、一定の期間が過ぎると、慣れて来ます。
- ☞ 第3点は、よく聴く事の重要性。この事もクルアーンを誦読する者の記憶力を無理なく強化します。

残念な事ですが、私達は正しくクルアーンを誦読することを忘れてしまったようです。イマームハティーブ高校(イマーム養成学校)や宗教大学でさえも、生徒達に完璧に正しく教育することができません。さらに、クルアーン・クルス(クルアーンの誦読を学ぶコース)でも、しっかりと教育されていないと私が申し上げても、どうか気になさらないで下さい。

モロッコ人のハーフィズ⁹のムナーヴィウから伝えられたお話でこのテーマを終わりにいたしますよう。

さて、ある若者がハーフィズになるために、勤勉に励んでいました。毎日朝まで、眠るのも惜しまず、クルアーンを全部誦み終えていました。次の日はもちろん先生の御前に蒼白い顔をしてやってきます。精神的にも身体的にも正に師としてふさわしい資質を備えた彼の先生は、この蒼白さの原因を彼の級友たちに尋ねます。「我らが師よ、あなたの生徒はクルアーンを一晩で始めから最後まで誦んでいます。」と口々に答えます。師は高貴なるクルアーンをこのような形で誦むことを望みませんでしたので、ある日、彼を彼の前に座らせました。「我が息子よ。（目下の者に親しみを込めて使う言い方）クルアーンが初めて下されたように誦まなければいけません。今日からあなたはクルアーンを今まで誦んだようではなく、私の目の前にいるように想像し、私に伝えるようにお誦みなさい。」と助言をなさいます。若者は師の助言どおりその夜クルアーンを誦し、次の朝、師の御前にやってくると、「先生、昨夜は高貴なるクルアーンを半分までしか誦めませんでした。」といいます。師は「よろしい、では今夜も高貴なるクルアーンを預言者（彼の上に平安あれ）の御前で正しく誦するように、誦みなさい。」と命じました。生徒は「ご自身にクルアーンが下されたお方の御前に私は居り、彼の御前で私は完全に正しく誦まなければならない。」と想像しながら、その夜、クルアーンをより注意深く誦しました。次の日、師に高貴なるクルアーンをただ四分の一だけしか誦むことができなかったことを伝えました。師は生徒の急激な進歩をご覧になると、師が生徒の課題を増すかのように、「今夜は、信頼される天使、ジブリール（彼に平安あれ）が使徒（彼に平安と祝福あれ）に啓示された正にその時に、あなたが一緒に聴いていると想像しながら誦みなさい。」生徒は、次の日「師よ、神にかけて、今日はただ一章だけしか誦めませんでした。」と語りました。師は最後の一步へと彼を押し進めます。「息子よ、今それを偉大なる主の御前で誦するかのようになさい。想像してごらんください、あなたが誦んでいるのを、今、アッラーがお聴きになっていらっしゃる、あなたのために下された御言葉をあなたと共に、あなたの目の前で傾聴なさっています。生徒は次の日涙を流しながら、師のところへやってきます。『アルハムドゥリッラーヒラッピルアーラーミン。アッラフマーニッラヒームマーリキヤウミッディーン』¹⁰まで、言いました。ところが、「イーヤーカ ナアブドゥ」¹¹と、どうやっても言うことができませんでした。『私はしもべとして、あなたにのみ崇め仕えます。』というわけですが、言えません。もちろん言おうとしたのですが、本当に私はどうなのでしょう。しもべとして何かしていますか。私はしもべとして、あまりにもなすべきことをしておりませんのに、あらゆるところで私をご覧になられ、お聴きになられているアッラーを想いますと、『イーヤーカ ナアブドゥ』を誦めず、次に進むことができませんでした。」と語りました。ハーフィズ ムナーヴィウはこの若者がそう長く生きる事が

⁹ クルアーンのすべて暗誦できる方

¹⁰ クルアーンの一章の節 2. 万有の主、アッラーにこそ凡ての称讃あれ 3. 慈悲あまねく慈愛深き御方 4. 最後の審きの日の主宰者に。（1章2-4）

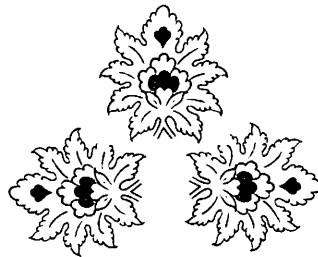
¹¹ わたしたちはあなたにのみ崇め仕え（1章5節）

できず、1日か2日後にこの世を去ったと記しています¹²。

その若者をこの水準まで向上させた学識者でクルアーンの意味を熟知したその師は、お墓の傍で、若者の様子を観ていました。その時、(墓の中の)若者は彼の師に聞こえるような声で「我が師よ、私は生きています。生を授け、自足者であられるスルターンの中のスルターンであられるお方の御前(タユイムという高い位階)に到達いたしました。そして、全く清算を受けませんでした。」と師に語りかけました。

このような偉大な若者について物語ることによって、「彼のように、クルアーンを読誦できないのなら、読誦せぬように。」と申し上げたい訳ではありません。しかしながら、そのような水準があることも忘れてはならないことでしょう。私達の魂に変革を齎さないクルアーン(の読誦)は、個人的生活においても社会生活においても効果的であるとは考えられません。私達はクルアーンによって善く変わることができ、彼(アッラー)の世界へ向かう事ができ、それぞれの深さに応じて、彼を感じるができるに違いありません。アッラーがその神秘を私達の心にお顕わし下さいますように。

いろいろな理由で、皆さんがお集まりになる時、長時間でなくても、そうですね、10分でもよろしいですから、クルアーンを読誦に時間を割いて、正しい発音の訓練を受けた方を見つけ、ご存知の方がご存知ない方に教えながら、ムカーバラの形で、一緒にクルアーンを誦み、聴くことができたらと心から私は願います。



¹² その意味を完璧に理解する方々にとって、クルアーンの御言葉とは、それほど、重いものです。

購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部200円（日本以外は1部250円）

国内： 1ヶ月 250円、6ヶ月 1300円、1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、6ヶ月 1600円、1年 3000円

（2004年、2005年、2006年のやすらぎカバー付き製本：郵送料込み2500円）

郵便振替口座番号：00100-6-354012 口座名義：月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号：630（春日部）口座番号：1134374 口座名義：月刊誌やすらぎ
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております。

〒156-0045 東京都世田谷区桜上水3-24-4, 203

www.yasuragiweb.com
info@yasuragiweb.com
yasuragi_nihon@hotmail.com

「やすらぎ」編集部